

スーパリアル麻雀 PVI

プライベート

P R I V A T E

花嫁候補4人がくりひろげるオリジナルドラマストーリー
プライベートを魅せたいあげる!!



© 1996 SETA CO., LTD

プライベート

スーパリアル麻雀 PVI

ドラマCD BOOK

ドラマ CD BOOK

ISBN4-89389-121-9 C0076 P2400E

定価2,400円（本体2,330円）
ビクター・ブックス/ビクター・エンタテインメント株式会社



9784893891211



1910076024000



プライベート

スーパーリアル麻雀 PVI

ドラマCD BOOK

ドラマ CD BOOK

■ スーパーリアル麻雀 PVI

プライベート

PRIVACY



花牌娘五人の日常を切り取るリアルドラマストーリー
プライベートをテーマにした一冊！



1910076024000



ビクター・エンタテインメント株式会社
© 1994 BETA CO., LTD.

スーパリアル麻雀 P.V.

プライベート

花牌戦4人がくりひろげるオリジナルドラマストーリー
プライベートを魅せあげる！



© BETA CO., LTD.

スーパー
リアル麻雀
PVI



トランプCD
BOOK



© 1996 SETA CO.,LTD





○イチロー大好き女子高生

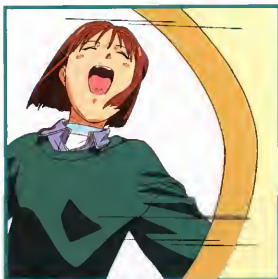
ROOM

●お部屋からこんにちは●

香山タマミ

T A M A M I K A Y A M A

●生誕：6月28日生まれ（かに座）16才 ●血液型：A型 ●身長：153cm ●3サイズ：B：76 W：61 H：82 ●趣味：友達と遊ぶこと ●職業：高校1年生 ●出身地：長野県 ●好きな物：アイスクリーム、漫画 ●苦手な物：マット運動、黒板を爪でこする音 ●ニックネーム：タマ







○のんびりペースの女子大生

ROOM

●お部屋からこんにちは●

来宮 ゆかり

YUKARI KINOMIYA

- 生誕：2月13日生まれ（水瓶座）19才 ●血液型：A型
- 身長：163cm ●3サイズ：B：82 W：57 H：85
- 趣味：乗馬、ジグソーパズル ●職業：大学1年生（S大学農学部）
- 出身地：北海道 ●好きな物：緑、動物
- 苦手な物：地下鉄、人混み







幼稚園ではアイドル「マリリン」

ROOM

●お部屋からこんにちは●

栗原真理

M A R I K U R I H A R A

- 生誕：4月11日生まれ（おひつじ座）24才 ●血液型：O型
- 身長：168cm ●3サイズ：B：87 W56 H：89
- 趣味：ゲーム、映画鑑賞 ●職業：幼稚園の保育
- 出身地：福島県 ●好きな物：シュークリーム、旅行
- 苦手な物：雷







ROOM

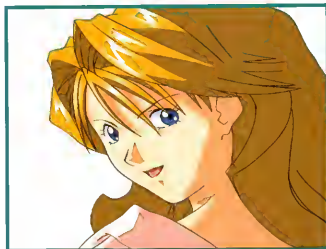
●お部屋からこんにちは●

クリス・ガーランド

CRISTINE GARLAND

- 生誕：8月18日生まれ（獅子座） 23才 ●血液型：B型
- 身長：172cm ●3サイズ：B93 W58 H89
- 趣味：フィットネス、史跡巡り ●職業：留学生（S大学人文学部）
- 出身地：USA西海岸 ●好きな物：綿パーティー、ラベンダー
- 苦手な物：蜘蛛、塩辛 ●好きなタレント：ジョン・ローン

●
純和風のアメリカン







CHARACTER BACKGROUND STORY

雀士藤兵衛爺さんの孫娘。香山家に間親と祖父の4人住まい。タマミだけは敷地内の離れに部屋を持っている。お爺ちゃんっ子として育ち、麻雀も祖父から教えてもらったが、マジメに上達する気が無いようで腕のほうはいマイチ。現在、麻雀よりもシャ乱Qが好き。

今年高校生になったのに、よく中学生と間違えられてしまう。今時の女子高生にしては小柄で、さらに丸顔が拍車をかけている。「頬が赤い」とか「顔が赤くなる」等という表現はタマミの前では禁句である。かわいらしい特徴なのに、タマミ自身はとても気にしているらしいので、家族もその部分には気を使っている。ナイーブな年頃なのだ。

子供扱いされるのには抵抗があり、なにかと背伸びしてしまうが、その態度がよいけいタマミを幼く見せてしまう。しかし、タマミはそのことに気付いていない。

中学時代、高校生になったらステキな彼ができると勝手に思いこんでいた。しかし、現実はその甘くはない。地元の高校に進学したので、まわりの環境にあまり変化はなく、バス通学になった分遅刻の心配が増えただけだった。部活はソフトボール部に所属、好きな野球選手はイチロー。今は「高校を卒業する頃には胸も大きくなってステキな女性に变身する」というイメージを抱いている。

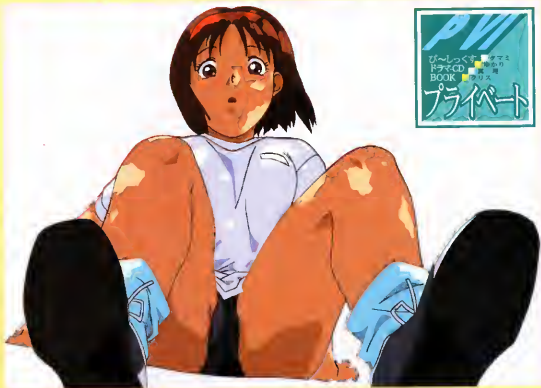
がんばれタマミ！ キミはまだ若い！

Life

PRIVATE

●卒業までにはステキな女性に变身するだもん●

TAMAMI KAYAMA
ステキな彼氏、募集中！



麻雀よりも
シャ乱Qのほうが
すきなんだもん

T A M A M I
K A Y A M A

ま
だ
ま
だ
こ
れ
だ
か
ら
ん
だ
も
ん



PRIVÉ Sexy Shot







Life

PRIVATE

●都会のペースにはまだまだついていけないな●

YUKARI KINOMIYA
ショートカットにしちゃおかな!



CHARACTER BACKGROUND STORY

北海道出身。内陸部の牧場の娘。大学進学のため家族の元を離れ、香山家のそばのアパートに住んでいる。あこがれの都会暮らしが始まったが、人の多さに戸惑うばかり。

北海道時代、冬場は娯楽が少ないので家族麻雀で麻雀を覚えた。麻雀の打ち方も勝手にいくというよりは、みんなで楽しくというタイプなので、それほど強くない。

大学へ通う間は好きなことをさせてもらって、卒業してからは実家の牧場を手伝おうと農学部を選んだ。サークル活動は乗馬。もちろん、馬には子供の頃から慣れ親しんでおり、サークル活動が楽しいことは否めないが、最近はやや不満。広い草原で風を切っていたゆかりにとって、学校の馬場は狭すぎるのだ。

乗馬だけでなく、スポーツ全般が得意。人と競うことは好きではないけれど、体を動かすのは大好きで、スポーツ以外のことにもマメな働き者。タマミとも町内のドブ掃除当番で知り合った。

こちらに来てから友達がまだ少なく、このところホームシック気味。おおかたで優しい性格、北海道のんびりペースを大学の友達からはトロいと諷刺されているようだ。もともと人見知りする性格ではないのだが、都会の女の子の華やかさに気後れしてしまう。ファッション誌を眺めてはため息をつく今日この頃。思い切って髪をショートカットにしてみようかと考えたりもするが、まだ決心がついていない。がんばれゆかり! そのままのキミがいい!

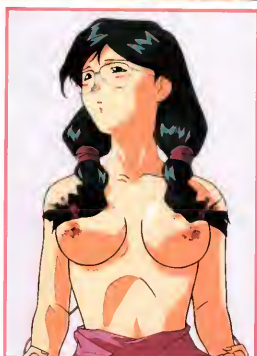




トロいんじゃないくて、ただ
ベースがのんびりなの...

YUKARI
KINOMIYA

最近、なんだか
ホームシック
ぎみなの...



PRIVÉ Sexy Shot







CHARACTER BACKGROUND STORY

明るく優しく、ルックスも良い、園児に大人気の保母さん。短大入学の途中に福島を出て、就職してから住んでいるのは2DKのマンション。職場の幼稚園が香山家の近くなので篠原菜摘さんに出会い、麻雀を教えてもらっている。麻雀を始めたきっかけは、一人暮らしを始めた頃、たいくつを紛らすために買ったファミコン。アクションゲームにはついていけなかったのですが、麻雀ゲームで遊んでいるうちに人とも打てたいと思うようになった。駆け引きやゲームには向いていたようで、麻雀もそこそこの腕前に上達した。

勤め先が幼稚園という環境から独身男性との出会いにほとんど縁がない。園児だけでなく園児のママのアイドルでもあり、彼らの間では「マリリン」とひそかに呼ばれている。当初はイヤだなと思っていたが、最近ではもう慣れた。園児のみならずママのあしらいも上手くなったようだ。

密着は園児の世話に追われて、グッタリして寝毛。やっぱり一人が一番と思う反面、少し寂しくもある。そう、何か物足りないのだ…。お料理上手で子供好き、世話好きの尽くすタイプ。でも、彼とはあまり長続きしたことが無く、男運が悪いんじゃないかなとこのところ思っている。

海のそばの生まれなので、水泳は多少できるが、その他のスポーツはほとんど苦手。しかし、スタイルが良いため運動神経が良さそうに見られてしまうのが困りもの。園の運動会の日、障害物リレーで先生チームのアンカーに選ばれたときは大恥をかいたと思っている。でも、真剣に走らせて走る姿でマリリンファンが増えたことは言うまでもない。がんばれ真理！ キミにぴったりの人がきつという！

Life

●独身男性との出会いにほとんど縁がなくて…●

M A R I K U R I H A R A

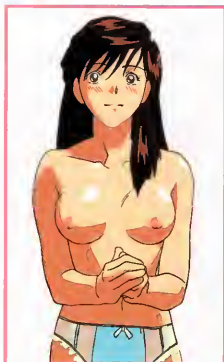
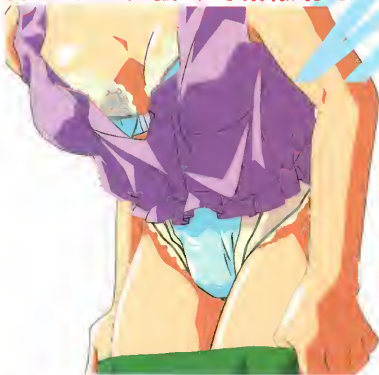
私って、男運が悪いんじゃないかな…



最初は、ファミコンのゲームだったんだけどな〜…

M A R I K U R I H A R A

若いのに、強くて素敵ね！



PRIVÉ Sexy Shot



Private





CHARACTER BACKGROUND STORY

アメリカ西海岸から来た留学生。東洋の神祕にひかれ、アメリカで大学を卒業後、日本の大学に留学している。10代の頃から日本びいきなので、すでに日本語はペラペラ、神社仏閣、東洋文化の歴史などについては日本人よりも詳しい。しかし、そのあたりの知識は本から学んだもので、生活上の一般常識の認識には少し怪しいところがある。

香山邸の近所の神社を見学に来たときに散歩していた藤兵衛と出会う。なぜか二人は意気投合し、クリスは香山家の居候になった。純和風の日本家屋に住んでみたいと常々思っていたクリスと、「やっぱり女は全髪ぢゃ」の藤兵衛の利害が一致したのだろうか？なんにせよ、クリスは香山家の一員として家族に受け入れられ、楽しい毎日を送っている。

文化交流はゲームからということで、爺さんから麻雀を教わったが、もともと頭がいいため、今では4人の弟子の中で一番強くなっている。そのお礼にクリスは香山家にハーブの恩恵をもたらした。本草学、華道なども学んでみたクリスだが、やはり自分が一番リラックスできる香りは樟とラベンダーという結論に行き着いた。幸い香山家の風呂桶は樟である。最近ではゆかりの助けを借りて、庭にハーブガーデンを作っている。

そんなクリスが選んだアルバイト先が居酒屋「てっちゃん」である。日本中のどここの郷にでもあるような赤提灯の店だ。庶民のバブ・居酒屋で働き、日本情緒を肌で感じている。フォーチュンクッキーが日本の物ではないということを知っただけでも大収穫だそうだ。しかし、ホビーという飲み物だけがまだ謎らしい。ルートビアのような物とらえているようだが…。この「てっちゃん」でもらったお金を少しずつ貯めて、いつかは宮島と天の橋立を見に行くのが今の目標。がんばれクリス！ キミは我が道をゆけ！

●そのうち、宮島と天の橋立を見に行くんだ～●

CRISTINE GARLAND

いろいろ試したけど、ラベンダーの香りが一番のお気に入りなの…

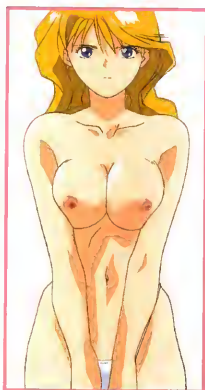
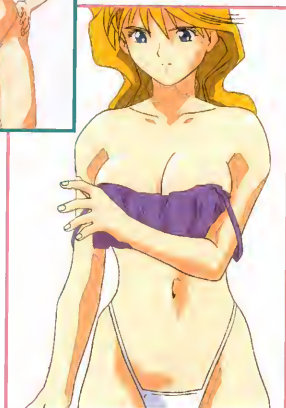
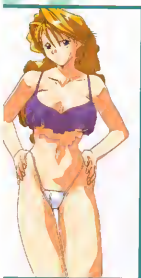




文化交流はゲーム
から…なんて、は
じめた麻雀なの…

CRYSTINE
GARLAND

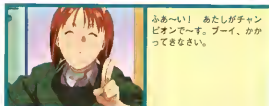
ツイてる人
にはかなわ
ないわネ～





PRIVÉ
Sexy Shot

スーパーリアル麻雀PVIキャラクター百面相



ふあ〜い！ あたしがチャンピオンで〜す。ブーイ、かかってきなさい。



ありゃまあ〜つよいね〜！ けっこう〜。ぬがなきだめだよ〜。エッヘ。ウッフ〜！一回勝ったくらいで調子にのらないでよ〜。



あ〜、また負けた〜！ ちえ〜……。鼻の下伸ばして〜、……エッチ〜。



また〜、負・けた〜！ おっかし〜な〜！ どうも調子でないな〜。へへへ、ナイス・パディでしょ！



あつ、あつ〜！ まだまだ、これから大きくなるも〜ん



あり〜……。負けちった〜……。でも、悔しくないも〜ん！ イ〜ダ！ 人生は山あり谷あり、あたしより強い人、いっぱい、いるも〜ん。あんただけじゃないも〜ん！ あんたなんか……コテンパンよ〜ダ！



(ピンッポ〜ン) あ〜あなたタマちゃんの知り合いの人ですか？ 麻雀が強いっていう……。じゃ〜、勝負ですネ！



あつ！



また負けちゃった〜！ 強いんですネ、あなた……！ あんまりジロジロ見ないでください……はずかしい！



ウ〜ン！ また、負けたわ〜。なんかちよつと……はずかしいな〜！



スゴク〜強いんですネ〜！ こんな事はじめて……。あなた、スゴいわ〜！



ほんとに、あなた、スゴいわ〜。あつ……！ こんなのはじめてヨ〜！ 完全にあたしの負けネ！ でも、これ以上はダメ！……ゴメンネ！ そのかわり、あたしより麻雀の強い人、教えたげる。……ガンバってネ！

タマミ負け面相



ワクワク面相



ゆかり負け面相



ワクワク面相





(ピンッポーン) はーいっ！
いらっしやい。話はやめち
ゃんから聞いてるわ。麻雀
強いんでっすね。



ワッ！ ステキ！ さつ、次
の勝負をしましょ！



麻雀って確率とヨミでしょ。
あなたスゴいわね！ もう、
負けないわよ。



若いのに強くてステキね！



スゴいわね、……次が最後
の勝負ね。負けないわよ。



スゴいわ！ あなた、天才だ
わね！ あなた、ほんとにス
ゴイ人だわ。これなら、あ
の人に勝てるかも。ネッ、ひ
どつ、お願ひがあるの。聞
いてくれないかな。



(コンコンコン)
WELCOME!



まだまだ、勝負ははじまった
ばかり。勝って、兜の緒をし
めろ、ヨ！



チッ！ あなた、ツイてる
ワ！ 2度もマグレが続くな
んで……。



あなた、トリック使ってない
でしょうネ！ まだまだね～
……。勝負は最後までわか
らないわヨ。



OH! ジーザス！ 結局、負けて
しまいましたっ……。あ
たしが負けるなんて！ あな
たスゴイね！ あたし、尊敬し
ちゃうわ！ チェッ！ (キ
スマーク)

真理負け面相



ワクワク面相



クリス負け面相



ワクワク面相



収録舞台裏

もう一つのPVIの世界。
ヒロインたちからのメッセージ。



実は、初めて全員いっしょに集まったという、PVI 4人娘の最も嬉しげな瞬間。収録は軽快なテンポで進んだ。

声優起用のキャスティングには、より、神経を使ったせいなのか、ゲーム音声の収録時には、4人揃って、てな訳にはいかなかったみたい……。ゲームでは、1フレーズに何度もリテイクして、ゲームキャラクターのイメージを創っていく。それに対して、ドラマはゲームで完成されたキャライメージで、声優さんたちがどう物語を演じるか?……の掛け合わせの世界。そんな訳で人気者の声優さんたちのスケジュールをなんとか調整していただいた貴重な1日だったのです。当然の事なんだけど、タマミ、ゆかり、真理、クリスと4人揃って台本を読み始めるとそれだけで、PVIの世界になっちゃうんだから……。あー、なんて声優さんって偉大なんだろう。と納得させられた1日でした。



無事、収録を終え、セタさんのP's CLUB会員用にサイン色紙のサービス。お疲れさまでした……。

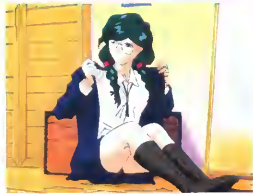


ゲームセンターでは、ファン漫画の寄身大POPを前に記念撮影。PVI ドラマ CD-BOOK 第2弾なんちゃって。もう1度お世話になりたいです。



■豊嶋真千子
MACHIKO TOYOSHIMA

●生誕：12月28日 ●出身：茨城県取手市 ●特技：普通免許、英検2級、ピアノ
●主な出演作品：●アニメ/CX・ドラゴンボールZ/TV朝日・も LAM
DUNK/TV朝日・セーラムンS/TV朝日セーラムンSS パラ
パワ役 ●劇場用アニメ/ストリートファイター2 ●ドラマCD/ツインビ
ーPARADISE ●CM/ラジオCM・プチセブン/ラジオCM・日清 桃金ラ
ーメン ●ラジオ番組/TBS (日) 25:00~25:30 TV GAME RACKONS



■大塚 端恵
MIZUE OHTSUKA

●生誕：3月21日 ●出身：北海道札幌市 ●特技：ジャズダンス・書道・九州弁
●主な出演作品：●アニメ/NHK BS・マイク次郎 ケン太役/CX・フヨシシ
っかりしなさい/CX・キレツ大百科 小塚晴役/CX・ガリバーボーイ/
WOWOW・シンブゾンズ ●洋画/NHK TV・ヒバリーヒルズ90210他/TX・
ダーティーキラー他/販売用ビデオ ベーバーボーイ ●教材用ビデオ/AIDS
対策ビデオ他 ●TV/TV朝日・ドラマ・クニさんの魔法たち (朗出し)
/TBS・花王愛の劇場「なかし」・「とってても母娘」 (各朗出し) ●OVA/
BAD BOYS2 中井かわり役/幼稚園就職せんきゅ ●ゲームソフト/M15感
度に生まれて/リヒト王子役/メタルエンジェル2 イライザ・アイスバグ役



■柳沢三千代
MICHIO YANAGISAWA

●生誕：2月26日 ●出身：大阪府 ●特技：関西弁、空手
●主な出演作品：●アニメ/NTV・それゆけ! アンパンマン カレーパンマン
/CX・きき伝説シュート 池子役/TV朝日・聖闘士星矢 タツヤ役/TV
朝日・美蘭くん 理れ米エツ子役/TV朝日・まじかるウタルーとくん伊和
川武伊役/TV朝日・機動戦士Vガンダム エリシヤ役 ●TV/NHK・大好
き ねんどうママ ママ役/CX・おはようナイスディ 生ナレーション/名古屋
屋TV・平成のオキナ ナレーション ●舞台/船月小春主宰「劇団NOISE在
籍10年」、海橋悠可作「不可」 ●教材/福武書店・Englishチャレンジ (小
五コース) マキちゃん役



■小山 裕香
YUKA KOYAMA

●生誕：2月9日 ●出身：広島県広島市 ●母城：B-C ●特技：広島弁
●主な出演作品：●アニメ/NHK BS・ゴールF4 宮本真役/CX・まぼろし
まぼろちゃん みみ子役 ●OVA/バスタード ティア・ノート ヨーコ役
●TV/NHK・リポートにっばん レポーター/NHK・番組ガイド 司会アシ
スタント/NHK BS・週刊ブ・クレビュー 司会アシスタント/TBS・後援特番
ナレーション ●ラジオ/OR・奇島・藤井のジャストミート アシスタ
ント/OR・とうきゅうサウンドパワース MC/TFM・ニュース キャス
ター ●CM/タカラ・ジュエリー・T-e-iサービス



ドラマCD
BOOK



© 1996 SETA CO., LTD

▶ 上記正方形絶縁部分から切り抜きご使用ください

■ スーパーリアル麻雀 P VIドラマCDパッケージキッド ■

121F

PVI PRIVATE

DRAMA CD BOOK

● 注 ● 印刷の都合上裏表若干のズレが生じます。
裏面の物と見比べて、使いたい方の側の
白線で切り取ってご使用ください。



ドラマCD
BOOK



DRAMA CD BOOK

PVI PRIVATE

121F



上記正方形絵柄部分から切り取ってご使用ください

■ スーパーリアル麻雀 PVI ドラマCD パッケージ キット ■



気に入った娘はおったじやろうかの〜



PV

●お問合せ先：ビクターエンタテインメント（株）AMPソフト制作部 TEL03-5412-2919

GAME SOUND TRACK



7月24日発売

1996

スーパーリアル麻雀PV
オリジナル・ゲームサウンドトラック
VICL-2171

税込価格：2,000円（税抜価格：1,942円）

- アーケード版
「スーパーリアル麻雀PV」
のゲームミュージックを完全収録。
- 4人の声優さんが歌うテーマ曲
「もうちょっとで…いい感じ」を
フルバージョンで収録。
- ボーナストラックとして
タマミ役 豊嶋真千子さんの
オリジナル・ボーカル曲
「HELLO, I LOVE YOU」を収録。

PV

●お問合せ先：ビクターブックス/ビクターエンタテインメント（株） TEL03-3486-4361

DRAMA CD - BOOK

好評発売中

1996



スーパーリアル麻雀PV
ドラマCD - BOOK

税込価格：2,400円

（税抜価格：2,330円）

- 「スーパーリアル麻雀PV」
のオリジナルドラマCD付き
ファンブック！
みづき、綾、晶、と
ふたたび会える……
楽しさいっぱいの
ファン必携のアイテム！



を言って2対0で負けてしまった。
しかし、試合終了後、どちらからともなく歩み寄って握手をした両チームのナインは、満足した顔だった。

「タマちゃん、お疲れ！」

亜樹が声をかける。

「ごめんね」

「なに言ってるのよ。BLに2対0なら上等よ。なんてたつて去年の県大会優勝チームなんだから」

そういうと、亜樹は

「じゃ、あたしたちもうちょっと練習していくわ。ありがとうね」といって残して走って行った。

気がつくときそばには真理とゆかりとクリスがいた。

「そうね、タマちゃんを見てたらこっちが疲れたよ」

クリスも苦笑いしながらいった。

タマミは照れくさそうな表情をする
と、大きな伸びをして叫んだ。

「あーあ、おなかすいたあ」

「いうと思った」

真理の声が、続いた。

翌日、タマミは学校で小川先生に呼ばれた。

「おう、香山。昨日はお疲れさん」

「はい。大変でした。でも先生が真理さんと知り合いとは思いませんでしたよ」



「いや、俺の知り合いじゃなくって、俺の女房の後輩なんだよ」

小川先生は照れくさそうな笑いを見せた後、急に真面目な顔になった。

「ところで、香山。昨日のテストなんだがなあ」

「え？ そんなに悪かったですか？」

「いや、悪いわけじゃないんだ。ほら」

そういうと、先生は答案用紙を見せた。

「なんだ。満点じゃないですか。よかったです！」

「よかないよ。ここを見ろ」

「あ！」

そういつて先生が差した先には白紙の氏名記入欄がある。

「お前なあ……なんでこういうドジばかりするんだ？」

「エヘヘ……」

「ま、追々試験は勘弁してやる。だがそのおつちよこちよいがなおるまで、トイレ掃除係にするからな」

「あーん。先生！ 助けてー」

タマミの声が、職員室の窓を揺らした。

その応援を背に受けて、しり上がりに調子をあげたタマミは、続く3、4、5回を無得点に抑えた。

しかし、味方も相手投手をまったく打てず、残すは後2イニング。タマミは先ほどからしきりに汗を拭っている。

「タマちゃん、疲れてるみたいね」ゆかりが心配そうにいった。

さて、6回の表、相手打者は監督からなにか指示を受けてバッターボックスに入った。

亜樹のサインは外角へのカーブ。バッターは、その球をセーフティバントした。

いち早くマウンドを駆け降りたタマミだが、判定はセーフ。

続く3番バッターが大きく素振りをしてながら打席に入る。

タマミがセツトポジションから第1球を投げる。

バッターはバントの構えをした。「ヤバイ!」

あわててかけ降りるが、バッターはバントを引いた。

ストライク。

続く2球目はボール。3球目もボール。

バッターはバントの素振りをみせて、揺さぶってくる。

タマミはもうヘトヘトだ。

バッターは見事な送りバントを決めた。

ワンアウト2塁。

続く4番バッターは、今日2本のヒットを放っている。

タマミが初級を投げると、彼女もまたバントの構えをした。

「ひどい! 正々堂々勝負しなさいよ!」

ゆかりが怒る。

その時、相手チームのコーチが監督に詰めよっていった。

「正々堂々と勝負しましょうよ!」

「なんだと? バント戦法は卑怯だ! というのか?」

「相手のピッチャーをつぶすためだけに、今日当たっている4番にバントさせることはないですよ!」

「フン、偉そうに。ここは大リーグじゃないんだ。高校野球はバントがセオリーなんだ!」

「なんだって!」

コーチがウィンドブレーカーを脱ぎ捨てて。

「あーっ! クリス!」

真理が大声をあげた。

そう。監督に喰ってかかった相手チームのコーチは、クリスだった。

「な、なんだ。君は向こうのスパイだったのか?」

監督は大声をあげた。

そして4番打者にこういった。

「いいか! 相手はへばっているんだ。バントで揺さぶるんだ!」

だが、その時思わぬことが起きた。いわれた4番打者がこういったのだ。

「監督、今日私は調子がいんです。勝負させて下さい!」

「なんだと?」

だが、他の選手達も口々にいった。

「コーチの方が正しいと思います!」

「勝つのがすべてじゃないんだから!」

「気持ちよく試合しましょうよ!」

やがて、監督は折れた。

「フン、じゃあ勝手にすればいい。わしはしらん!」

思わぬアクシデントの後、試合は再開された。

相手打者はタマミと目を合わせるとニコツと笑いかけた。

タマミも笑い返し、すぐに真顔になって投球した。

カーン!

大きな音とともに、タマミのボールは舞い上がって校舎にぶつかった。

ホームラン。

タマミはガックリと膝を落とした。

結局、試合はこのホームランがもの



「真理さん?」

「小川先生は都合でお休みです。追試は三十分後に行いますから、それまで自習してらっしゃい」

「はい」

一緒に追試を受けるのは5人ほどである。

教科書とノートを取りだして、机に並べたタミミはこっそりと真理を見た。真理は優しくそんな顔で笑っている。

「ねえ、タミミ。知り合い?」

横に座った恵美が小声で聞く。

「うん」

「綺麗な人だよ。小川の後輩だって」

「そうなの?」

「そこ、なに話してるの?」

真理が声をかけた。

「いえ、なんでも」

あわてて答える二人。

なんとも形容しがたい緊張感が教室を包む。

「それじゃ、ちよつと早いけど追試を始めましょうか?」

真理がいった。

追試は一時間三十分ある。

そして時計は十時十分だ。

問題が配られる。

「このままならちよつと十一時に遅れるくらいで終わるわね」

タミミは真理の配慮に感謝した。

追試そのものは楽勝だった。

なにせ、タミミの点が悪かったのは、

本当に回答欄を間違えただけだったのだから。

四十分ほどで、問題をすべて記入してしまったタミミは窓の外に目をやった。

校庭で、女子野球部が出て練習をしている。

そこに、今日の対戦チームが到着したようだ。

相手チームの監督のところに亜樹が走って行くのがみえた。

どうやらもめているようだ。

試合開始をタミミが来るまで遅らせてほしいと頼みに行ったのだろう。

時計を見ると、十一時を少しまわっている。

タミミはイライラしてきた。

その時である。

「じゃあ、もう終わっている人は、用紙を提出して下さい」

試験官である真理がいった。

「え? いいんですか?」

タミミが聞く。

「ええ。終わってボーっと外を見ていたら、まだの人たちの邪魔になりませんからね」

いい方は厳しいが、親切でいつてくれているのは間違いない。

タミミは真理に一礼すると、慌てて答案用紙を提出し、教室を飛び出した。

そして十五分後、グラウンドでは「プレイボール」の音がかった。

先発ピッチャーはもちろんタミミである。

初回、タミミは2者連続三振をとった後、2塁打を打たれたものの、後続を抑えた。

「大丈夫?」

亜樹が声をかける。

昨日は勉強のために夜更かしし、朝から水泳と試験というスケジュールをこなしたタミミはさすがに疲労を感じてた。

こちらも3者凡退で、2回に突入した。

相手のバッターは、ウインドブレイカーで顔を隠したゴチらしい人間に何かいわれて打席に立った。

タミミが振りかぶって第1級を投げる。

バッターは速球につまったものの、1塁線を抜ける2塁打を放った。

「あれ? 配給を読まれているのかな?」

タミミはキャッチャーの亜樹を呼ぶ。「ストレート勝負は読まれているみたい。カーブ主体にいくわよ」

そして彼女は残りの打者を3者三振に討ち取った。

「だんだんよくなってきたよ」

亜樹が笑いかける。

そのころには、試合が終わったゆかりや試験の終わった真理も応援に駆けつけた。

「そんなことはないわよ。あそこはお嬢様大学だから、運動部には対した選手はいないし」

「で、でも私は素人ですよ」

「それでもうちの部員には五十メートル泳げる子はいないんだもん!」

「へ?」

「その……私だって二十五メートルを足をつかないで泳げるようになったのは先週だもん」

「せ、先輩。うちの水泳部って……う」

「そう。近所からはスイミングクラブっていわれてるのよ」

「はあ……」

「あつ、来たわ」

なるほど。相手の紅葉短大も、水泳部だというのは、ビキニの水着を着ていたり、バレオを巻いていたりなど、勘違いしている部員ばかりである。

「たしかに弱そうだけど、五十メートル以上は泳げるんだろなあ」

「香山さん。何かいった?」

「いえ、なんにも」

あわてて取り繕ったタマミは、相手チームの中に思わぬ人物を見つけた。その選手は、ただ一人、競泳用の水着を着て、ふくれている。

「ゆ……ゆかりさん」

「あら、タマちゃん」

「今日デートじゃなかったの?」

「デートよ。タマちゃんと」

「えーっ?」

ゆかりはことの発端を説明した。

つまり、ゆかりもまた、短大の水泳部から助っ人を頼まれたのだ。

「まさかタマちゃんが相手だとは思わなかったわ」

「こつちだって。てつきりデートっていうから……」

「だからデートっていうのは冗談よ」

「ちえっ」

「ま、とにかく手は抜かないからね」

「そんなあ。ゆかりさん確か水泳大得意じゃない。ちよつとは手加減してよ」

「フフ」

そうこうするうちに試合が始まった。タマミがエントリーしていたのは四百メートル自由型である。

なにせ、四百メートル泳げるのは彼女だけであるから。

一方、相手もゆかりただ一人であった。

もちろん理由は同じだ。

これまでの試合ではものすごい低レベルではあったが、さすがに短大チームの方が優勝している。

これが文字通り最後の砦であった。

「ヨイ、スタート!」

の声でプールに飛び込む二人。

水に踊り込む刹那、タマミは加藤を始めとする部員達の拝むような視線を感じた。

しかし、さすがにゆかりは早い。

スタートから飛ばしに飛ばし、ターン地点では七メートル近い差がついていた。

「ダメだ……」

思わず力が抜ける。

その瞬間、先に行ったはずのゆかりが溺れだした。

どうやらターンの時に足をくじいたらしい。

プールサイドでは騒然としたが、そんな様子が目に人らなかったタマミは、ゴールした瞬間に、ようやく異変に気がついた。

その時には棄権したゆかりが足を引きずりながら歩き始めたところだった。

「ゆかりさん、大丈夫?」

タマミが声をかける。

ゆかりは小声で言った。

「これは一つ貸しだからね」

タマミがリアクションに困っている

と、加藤先輩が声をかけた。

「あら、香山さん。もう九時よ。補習は大丈夫?」

「えっ、キヤー!」

シャワーを浴びるのもそこそこに、教室に飛び込んできたタマミは、そこで、意外な出逢いをする。

「おそいわよ。香山さん!」

遅刻してきたタマミを叱る声は、太い小川先生の声とは似ても似つかぬ柔らかな女性の声だった。

Novels ●ある晴れた日に●

「しかし、あの音でどうして目覚めな
いんじやろうなあ」

藤衛兵がほやき、クリスがなにも言わずに笑みをこぼすのも、日常の風景であつた。

さて、それどころではないのがタマミである。

彼女が水着に着替えてプールに出たのは七時十五分だった。

「遅かったわね。ハラハラしちゃったわ。」

加藤先輩が時計を見ながら言つた。

「すいません。相手は？」

「まだ準備中みたい。もうすぐ来るわ」
「えーっ？ 七時からじゃないんですか？」

「七時集合よ。準備体操とかがあるから、試合は八時からね」

「そんなあ」

「何？ 野球は十一時でしょ？」

「いえ、その前に九時から追試と補習があるんです」

「まあ。でもなんとかなるわよ」

意外にそつけない返事は他人事だからだろうか？

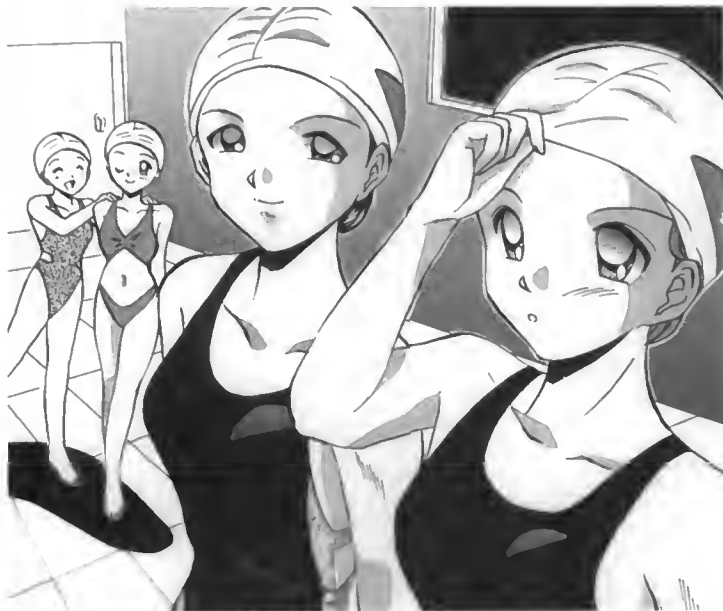
「で、相手はどこなんですか？」

紅葉女子短大

え？ 大学生？

そう

「や、やだ。勝てるわけないじゃないですか」



「きゃつ、誰かと思ったら水泳部の加藤先輩じゃないですか。」

「香山さん。明日の試合で負けたらうちの部は解散になるの。この危機を乗り越えるにはどうしてもあなたの力が必要なの。」

「で、でもー。私明日先約が……」

「わかってるわ。野球部でしょ？」

「うちの試合は八時からなの。大丈夫よね」

「えっ？ ええ」

「明日はどうしても負けられないのよ。ホラ、対外試合で2年間連続して勝利があげられなかったら、休部させられちゃうでしょ」

「えーっ？ 責任重大だなあ」

「大丈夫。あなたならなんとかなるわ。それじゃ、お願いね。七時にプールで待っているからね」

「あ、先輩」

しかし、加藤先輩は後ろを振り向くこともせずに、走って行ってしまった。

「もう、まいっちゃったなあ」

苦笑いして歩きだしたタマミに、さなる使者が……。

「あれ？ 小川先生」

「小川先生じゃない！ 香山、お前、前回の試験ひどかったじゃないか！」

「あ？ あれは、マークシートが一つずつずれてただけで……」

「なに？ 嘘をつけ！ 俺はなあ、お前には期待していたんだ。とにかく、補習と追試を受けてもらうぞ。明日九

時。教室に來い」

「せ、先生、明日は……」

「つべこべいいうな。俺だって日曜日くらい休みたいわい。いいな。九時。忘れるなよ」

そういうと、小川先生もまた去って行ってしまった。

「ウヒヤーどうしよう……」

タマミは頭を抱えた。

「それでいったいどうするつもり？」

真理は呆れながらタマミに聞いた。

「うーん、うまく行けば時間的には大丈夫なんだよね。水泳が七時、補習が九時、野球が十一時でしょ？」

「それならいいけど……」

「すごいねー人気者だね」

ゆかりがひやかした。

「もう、からかわないでよ。結構しんどいんだから」

「いや、それだけ期待されてるんだからいいじゃない」

「ホント。ねえ、ゆかりさん。明日応援に來ない？」

タマミがいうと、ゆかりはニヤツと笑ってこう言った

「ごめんね。私は明日デートだもんー」

「えーっ？ デート？」

「ウフフ……タマちゃんもデートでスケジュールが埋まればいいね」

「……ゆかりさん、最近冗談がキツクなってきたくない？」

「あはは。そうかしら？ じゃあね」

そういうと、ゆかりは帰っていった。

タマミは真理に向かっていった。

「じゃあ真理さん、応援に來てよ」

「うーん、私も友達と約束があるのよ」

「えーっ？」

「ごめんね」

タマミは最後に残っていたクリスを見た。

「ねえ、クリスちゃん……」

「エヘッ。実は私もダメなのよ。この間からコーチしている野球部が試合だね」

「じゃあ誰も来てくれないの？ あーあ」

そういうとタマミは部屋に戻っていった。残されたクリスと真理は肩をすくめて苦笑した。

目覚ましのベルがけたたましい音を出す。

そして一度止まり、二十分。

今度はさつよりも大きい声がタマミの部屋から響きわたる。

「ヤーン！ どうしても誰も起こしてくれないのぉ」

さらに五分後……。

ドタドタつと階段を駆け降りる音がしたかと思うと、

「いつてきまーす！」

という声とともにドアが開き、ロケツトのようにタマミが走っていく。

いつもの光景とはいえ、見事なものだ。



「お姫様。白雪姫は昔のお姫様にそっくりですね」

「なんでですって？」

「お姫様も、昔はあのように周囲に優しく、自然に振る舞っておいででした。ですが、エステに行ったり、整形したりするようになってから、あなたは変わってしまったのです」

こういわれて、白雪姫を見るお姫やがて、手を目にあてていう。

「そうじゃ。私は自分が歳をとるのが嫌で、だんだんと自分が嫌いになっていったのじゃ。白雪姫。悪かった。私はそなたのおかげで自分の過ちに気がつくことができたのじゃ」

そうして、大盛況のうちに劇は終わった。

メイクを落として顔を洗っている真理のところへ、タマミがやってきた。

「さへへ、真理さん。いいのかなあ？ 劇を私物化して」

真理も笑いながら返した。

「あら？ そんなつもりはないわよ。タマちゃんのために作ったんじゃない



から、気にしないでね」

だが、タマミはとんでもないというふうには手を振った。

「違わよ。老化していく自分を励ましたんでしょ？」

「なんでですってー？」

真理はげんこつを振りあげる真似をして笑った。

いつのまにか来ていたゆかりとクリスも一緒にあって、4人は大声で笑い出した。

しかし、話はこれで終わった訳ではない。

この時の真理の演技をビデオカメラで写していた園児の父親たちによって、彼女のビデオはプレミアムがつき、しばらくは各家庭で争議が絶えなかったという。クリスはその時のことをこう日記に記している。

『結局、真理の機転でハッピーエンドとなったわけだが、一つだけ疑問は残っている。すなわち、真理は問題のダイエット薬を試したのだろうか？』



ある晴れた日に

タマミはスポーツ大好き少女だが、これといって、どこかの運動部に所属しているわけではない。

ようは何にでも打ち込むというのが苦手なだけなのだ。

だが、彼女をめぐって、各運動部は水面下でスカウト合戦を繰り広げてもいたのだ。

「ねえ、タマちゃん。お願い！ 明日助っ人に来てよ！」

同級生の亜樹にこう言われたら、助っ人にいかなくちや女が立たない。

明日、亜樹が部長を務める女子野球部員は名門B.L.学園女子野球部との練習試合なのだ。

「もう、しょうがないなあ。わかったわよ。じゃあ明日の十一時にグラウンドへ行けばいいのね？」

「ありがとー！ タマ。待ってるからね」

そういうと、亜樹は嬉しそうに駆け出していった。

「さへへ。私もなかなか人気物ね」

そう思いながら箱へむかうタマミの前に、黒い影が立ちふさがった。「もう逃がさないわよ」

●マリリン激ヤセ事件● Novels

「あ、クリス。よかったあ」
ゆかりが安心したようにいう。

「ねえ、真理さんはどうなった？」
タマリはまだ心配そうだ。

「クリスは悲しげに首を振った。」

「とりあえず、私にできることはしてみたわ。あとは真理の意志ね。急激なダイエットでボロボロになっているのよ」

「やっぱりあの葉のせい？」

「真理が持っていたダイエツト葉は、別に有害でもなんでもない、安全な葉よ。だけど、精神的にね」

「え？」

「痩せなさや、痩せなさやっていう脅迫観念が重傷なの。今の自分をおかしているのを忘れていうっていうか……」

目を伏せるタマリ。

クリスは続ける。

「タマリ……あなたもそうよ。そりや痩せたい、綺麗になりたいっていう気持ちにはわかるわ。だけど、だからといって、今の自分をかわいがってあげるのを忘れたら……」

「うん……」

そこで、ゆかりが口を挟んだ。

「私たち、真理さんに何もしてあげられないのかしら？」

「そういえば、明日、真理の幼稚園でおゆうぎ会だっていうってな」

クリスがニコッと笑いながら言った。

「なにが出来るかわからないけれど。」

とりあえず会いに行ってみない？」

「そうじゃな。それが一番じゃ。じやあ明日にしよう」

藤兵衛の一言でその場はおさまり、明日みんなでおゆうぎ会に行くことになったのであった。

長いような短いような夜が明け、いよいよおゆうぎ会の日になった。

真理先生のクラス、ヒヨコ組の出し物は「白雪姫」だ。

楽屋となった体育館の一室で、準備をしている真理のところへクリスがやってきた。

「はい、真理。みんな連れてきたよ」

「あらっ？ どこにいるの？」

「部屋の外にいるよ」

「どうして入ってこないの？」

「フフフ。昨日あれからみんなに会ってね。真理がダイエツト葉でおかしくなったんじゃないかっていうもんだから、私もちよつといたずらしちゃったのよ」

「まあ」

「だから、とりあえず劇が終わってから種明かしをしようかと思ったの。それじゃあ頑張ってね！」

そして、いよいよヒヨコ組の出し物が始まった。

舞台があき、お城の部屋でお妃と鏡が話をしている。

「鏡よ鏡、この世で一番痩せていて美しいのは誰？」

「それは、森の奥に住む白雪姫」

「なんですってー！ エステにダイエツトに整形美容までしている私よりも、あんな貧乏で化粧品も買えない小娘が美しいというの？」

「あれ？ あのお妃を演じているのは……真理さんじゃない？」

声をあげたのはタマリであった。

「シッ！」

クリスがウインクしながら目で合図する。

タマリは、あのときの真理の表情が、この劇のお妃のメイクであったことを理解した。

その後、ヒヨコ組の白雪姫は意外な展開をみせた。

お妃は、白雪姫を抹殺するため様々な罠を張り巡らす。

といっても、毒リンゴを食べさせるわけではなく、ヤブ医者の整形美容を紹介してやり、いい加減なダイエツト食品を送りつけたりするのだ。

しかし、小人たちの活躍でなかなか目的を達せられない。

業をにやしたお妃は、自ら白雪姫を倒しに行く。

そこで……。

物陰から白雪姫を見るお妃。

一緒についてきた兵士がいう。



「はいはい。月があー」

「あんたたち、何やってるの？」

振り向くと、瘦せた顔色の悪いしわの目立つ女性が立っていた。

「それはアマテラスオオミカミでしょ？ そんなことしなくても隠れたりしないから、そこで下手な漫才をやるのはやめてくれない？」

顔立ちには美貌がにじみでいたが、それをおきなつてあまりある疲れきつた顔……それが真理であることを確認するに二人は5秒を要した。

「ま、真理さん」

「なによ、二人とも。ああ、この顔？ どう、綺麗でしょ？」

「えっ？ ええ……」

クリスは何と言っているのかわからないうちに、いい加減にあいずちをうった。

「真理は笑いながら、タマミに言った。『タマちゃん、あの薬、よく効くわよ』」

「なに言ってるのよ。今の真理さん、ひどい顔よ。ダイエツトなんて冗談じゃないわ」

「そういうと、一目散に走り去ってしまった。」

「タマミ！」

あわてて後を追おうとしたクリスを、真理が呼び止めた。

「クリス、ちょっと」

「えっ？ なに……キヤアア！」

翌日、香山家ではゆかりも交えての緊急会議が開かれた。

クリスが帰ってこないのである。真理の家にずつといるという。タマミが力説している。

「だから、真理さんもクリスも何かにとりつかれちゃったのよ。あの家には魔物が住んでいるんだわ。なんとか二人を救い出してあげないと、死んじやうよ！」

「ちょっと待った。言っていることがよくわからぬぞい」

「だからね。私とクリスが真理さんの家にいったの。そうしたら、やせ衰えて、疲れきつた真理さんが出てきて『私瘦せたでしょ』っていうのよ。もう口裂け女みたいなものなんだから！」

「そんなバカな……」

ゆかりが笑おうとする。

しかし、タマミの顔は真剣だ。

「バカでもなんでもそうなんだから！ 嘘だとおもったら見てきたら？」

「まあまあ、そう熱くならんで。それじゃあわしがみてるか」

藤兵衛が立ち上がった。

「私もいつてもいいですか？」

ゆかりが続く。

タマミは不安そうな顔をしながらも、

「みんながいなくな、私もいこうかな」といつてついできた。

その頃、真理の部屋では、真理とク

リスが話をしていた。

クリスが笑いながら真理にいう。

「ねえ、ちょっと、お灸が効きすぎたんじゃないの？」

「そうかな？ まあ偶然だったんだけどね。それもいいかなと思つて……」

「でも、ゆかりからも、真理が落ち込んでいつて聞いてたのよ」

「うーん、まあ確かにそうだったんだけどさ。私って、落ち込みが持続しないタイプなのよ。あの日だって、一晩寝たらずつきりしちやつてさ」

「でも、香山家にもこなくなつちやつたし」

「だからあ、幼稚園のおゆうぎ会が近くなつちやつて、忙しかつたのよ」

「そういつて、真理は笑つた。」

「でも、クリスが手伝ってくれたおかげでたすかつたわ。ありがとうね」

「どういたしまして。でも意地悪なお姫様のメイイクのまま外に出るのはやめなさいよ」

「アハハ。わかつてるつて！」

「じゃあ私、帰るね」

「うん。ゆかりやタマミも誘つてみるよ」

クリスは真理の部屋を後にすると、香山家に向かって歩き始めた。

そのときである。

血相を変えて走ってくるゆかり、藤兵衛、タマミの3人とあつたのは。

クリスは真理の部屋を後にすると、香山家に向かって歩き始めた。

そのときである。

血相を変えて走ってくるゆかり、藤兵衛、タマミの3人とあつたのは。

クリスは真理の部屋を後にすると、香山家に向かって歩き始めた。

そのときである。

血相を変えて走ってくるゆかり、藤兵衛、タマミの3人とあつたのは。

クリスは真理の部屋を後にすると、香山家に向かって歩き始めた。

そのときである。

血相を変えて走ってくるゆかり、藤兵衛、タマミの3人とあつたのは。

クリスは真理の部屋を後にすると、香山家に向かって歩き始めた。

そのときである。

血相を変えて走ってくるゆかり、藤兵衛、タマミの3人とあつたのは。

真理は一人暮らしをしている。
しかし、週に3回は香山家に顔を出し、ご飯を食べたり麻雀をしたりしていた。

しかし、その一件以来、ぱったりと香山家に顔を見せなくなってしまった。
「ダイエツト、うまくいってるのかなあ?」

と最初はヤジウマ根性を出していたタマリだが、あまりにも音沙汰がないのに、やや不安を覚えていた。

数日後、いよいよ心配になったタマリは、クリスを誘って真理の家に乗り込むことにした。

真理の住むアパートまで来た二人は、インターフォンを押す。

「真理さん。タマリです。ヤッホー元氣?」

しかし、応答はなかった。

「バカね。そんな脳天気な声を出してどうするの? 姿を見せないってことは真理はそうとう落ち込んでるんだよ」

クリスが珍しく(?)常識的なことを言ってタマリをたしなめた。

「じゃあクリスがやってよ」

「まかしておきなさい」

自信マンマンにクリスが呼びかける。
「真理。あなたは完全に包囲されている。おとなしく両手をあげて出てきなさい!」

「クーリースー! ふざけてんの?」

「あら? タマリよりましよ」

「あのねー!」

「なによ」

「どうすんのよ。よけいにでてこなくなっちゃったら……」

タマリはもう半べソだ。

「そうだ! あの手を使おう」

「なに?」

クリスは鼻をうごめかせて言った。

「伊達に日本の勉強はしていないわよ。タマちゃん、あなたカラオケ得意よね」

「え? まあ好きなことは好きだけど……でも、クリスが日本文化を語ると大体失敗するんだけどなあ」

「いいから、歌いなさい」

「えーっ? ここで?」

「もちろん」

「なんでよ? 恥かしいわね」

「いいから、そして私は横で踊るわね」

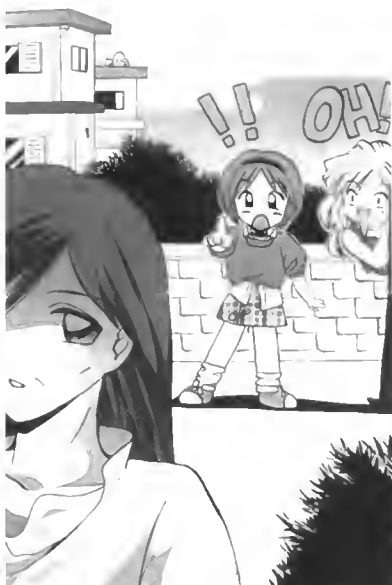
「!?」

タマリは明らかに怪訝な顔でクリスを睨んだ。そこで、クリスは説明した。

「いい? その昔、アメフラシオオミカミという太陽をつかさどる神様がヒステリーをおこして天の岩宿に閉じ込められてしまったの。困った人々は、彼女の閉じ込められている岩宿の前で飲めや歌えやの大宴会を催して、思わず何をやってゐるのか覗こうとしたアメフラシオオミカミを引きずり出したのよ」

「へえ、クリスって物知り」

「まあね、それじゃ行くわよ」





P R I V A T E

Novels ●マリリン激ヤセ事件●

はなく、先ほどのお母さん店員の大声響だった。

「まー、先生、入りませんか？ それじゃあもう一つ上のサイズをお持ちしますわね」

もう、なんてこう無神経なのだろう。真理は、今度はびつたりだったジーンズを持ってレジへ向かった。

そこで支払いを済ませると、その店員が意味ありげに笑いながらささやいた。

「先生、これお試しにならないか？」

「そういうと、小さな錠剤を手渡す。」

「これはなんですか？」

「今ね、アメリカでも流行のダイエット薬なんです。主人が仕事で扱っているものなんです。よかったですお試しになって」

「もう、頭にきちゃう！」

帰る道すがら。真理は怒りを爆発させた。

「でもいいじゃん。ウエスト60なら……」

タマリはそのことのほうがショックだったようだ。

「私なんか61だよ」

「あのねえ、タマちゃん。歳をとれば誰だって出るところは出るし引つ込むところは引つ込むものなの」

「そうかなあ？ じゃあ真理さんは高校生のときどれくらいあった？」

「え？ さあ覚えてないけど……」

だが、タマリは疑惑の目で睨んだ。

「ほーら、言えないじゃない。真理さん嘘がつけないタイプよね」

「そんなこと……」

「ねえ、真理さん、その薬効のかなあ？」

「タマちゃん、ダメよ。薬で痩せようなんて」

真理はつれない返事をした。

「えーっ？ そんなあ使わないなら頂戴よ」

タマリがふくれる。

「ダメー！ タマちゃん、別に太ってないわよ。今の時期に無理なダイエットをしたら身体に毒だわ」

「そんなことないよ。いいもん、私あとでデパートに行つたのんじやうから」

「ダメよ。よしなさい」

そのとき、道の反対側からゆかりが声をかけてきた。

「あら？ 二人とも面白い物？」

にこやかに問いかけるゆかり。だが、二人はやや暗い顔つきである。

真理はこれまでのいきさつを説明した。

「ふーん、確かにそのお母さん、ちょっと無神経ね。真理さんのプロボーションがいって嫉妬したんじやない？」

「嫉妬……？」

「だって、そのお母さんだって真理さんと歳は変わらないでしょ？ 同じ世代なのに、若くて綺麗な真理さんに嫉妬したんだとしても不思議じゃないわ」

「そうかしら？」

とタマリ。

しかし、真理はますます顔をしかめた。

「そうか……私も結婚して子供がいてもおかしくない歳なのね」

「やだ、真理さん。私そんなつもりじゃ……」

「わかってるって。でもねえ」

「ね、ねえ、ゆかりさん。ゆかりさんのウエストはいくつ？」

雰囲気を変えようとタマリが話題をそらす。

「え？ 私は今57だけど……」

「え!? 57？」

しかし、反応したのはタマリではなく真理の方だった。

「57かあ。私も二十歳のころはそうだったんだけどなあ」

気まづい沈黙が流れる。

それを破ったのは真理だった。

「決めた！」

ゆかりとタマリは顔を見合わせる。

「今年中……いえ、今月中に体重を4キロ落とすわ」

「真理さん、そんな必要ないわよ」

ゆかりが声を強める。

しかし、真理はタマリに向かっていった。

「もし、私が使ってみて効果があったら、タマちゃんにも薦めてあげるわ」

「わーい！ 頑張てね！」

脳天気なタマリが答えた。

マリリン激ヤセ事件

真理先生は優しい。そして明るくて強い。彼女はほとんどすべての男性にとって、理想の恋人であり、将来の妻であり、母だと思ふ。まさに非の打ち所のない完璧さ……。

そんな彼女が、ひとたび精神のバランスを崩したらどうなるか？

これは、完璧の裏側にある人間としての叫びを描いた物語である……はずだった……。

久しぶりの日曜日。

真理とタマミは二人で買い物に来ていた。元氣なタマミとは対比的に、やや憂鬱な表情の真理……。

「困ったなあ。どうしよう？」

「真理さんたら、まだ悩んでいるの？ いいじゃない、白雪姫で」

そう、もうすぐ彼女の勤めている幼稚園ではおゆうぎ会がある。

真理は、自分のクラス、ヒヨコ組の出し物のことで悩んでいるのだ。

「うん、まあ白雪姫をやることは決まったんだけど、なにか少しオリジナリティが欲しいのよね」

「オリジナリティ？」

「ええ。だってホラ、いじわるなお姫は、鏡が自分よりも美しいといった

からという理由でだけで、白雪姫を毒リンゴで殺そうとしたわけでしょ？」

「まあそうね」

「だけど、ただそれだけの理由で人を殺そうとするものかしら？」

おもわずタマミは吹きだした。

「そんな、お話なんだからさあ」

だが、真理は真顔で言う。

「そりやお話なんてそんなものよ。

でも、せっかく劇をする以上、子供達にとつてリアリティのあるものにしてあげたいのよ」

「そう？」

「だって、内容を理解や納得しないまま、機械的にセリフをいうだけの劇なんて、無意味だと思わない？」

「……ふーん」

タマミは真理の顔をのぞき込んだ。

「な、なによ、タマちゃん」

「真理さんって、いろいろ考えているんだなあ。同じ先生でも、うちの学校の先生に比べたら天と地の差がわ」

「そんな……高校と幼稚園じゃ違うわよ」

「あら？ 先生じゃありません？ いつもうちの健太がお世話になってます」

二人の会話は、デパートの婦人服売り場の店員の声で断ち切られた。

「あら、どうも」

「こやかに挨拶を返す真理。だが、こういうところで声をかけられるのは、

けつして愉快ではない。

「今度はおゆうぎ会で白雪姫をやるんですって？ うちの子は森の小人の役をやるんだって、それはもう大喜びしてますのよ」

買い物にきてこんなことをいわれても困ってしまう。

しかし、相手はかまわずに続けた。

「あら、すいません。今日はお買い物ですよ。それでどんなものを？」

「ええ、ジーンズとブラウスを」

「あら、それなら……」

静かに自分だけで服を選びたい。しかし、こうなってはそれは夢だ。

ここで買わなければ、あとで他のお母さんたちになんといわれるかわからない。

「先生、ジーンズのサイズは？」

「ええと……ウエストは57だったかしら」

「あら、細いわねえ。じゃあこちら

なんかいかがかしら？」

そういわれて、渡されたジーンズを持って試着室に入る。

さっそく履いてみようとしたのだが……入らない。

「やだ、太っちゃったのかしら？」

そう思いながら、彼女は試着室の外にいるはずのタマミを呼んだ。

「ね、ねえタマちゃん。これより一つ上のサイズないかしら？」

しかし、返ってきたのは、タマミで



PRIVATE

Novels ●ゆかりデビュー！？●

は、な、な、なんとゆかりであった。
思わぬ剣幕にびっくりして見つめる
クリスにゆかりが叫んだ。

「あのねー。そんなホルスタインみ
たいなオッパイだけのグラマーなんか、
運動で鍛えたバランスのとれたプロポ
ーションにかなうものですか！」

「ふ……ふーん」
クリスも反撃に出る。

「あなたがバランスが取れていると
思っているのは、まわりにベチャバイ
やお肌の曲がり角間近なのがいるから
だよ」

「べ、ベチャバイって、あ、あたし
ー？」

タマリがブルドックのような顔をし
て叫ぶ。

「お肌の曲がり角……フフフ、そう、
そう思ってたんだ」

真理がハンニヤの顔で答えた。

それからのことはあえて書くまい。

彼女たちは当初の目論見も忘れて、さ
んざん大喧嘩し、気がつくときアウトマ
ンの代わりに野次馬たちが集まっていた。

「こ、こりゃどうも。お騒がせしま
した。いやー、なんかうるさくて、お

芝居したんですね。ははは」

藤兵衛のナイスフォローがなかった
ら、どうなっていたことか……。

しかし、この騒動で、一つだけ収獲
があった。

そう、ゆかりがその後、以前にもま
して明るく積極的になったのだ。

クリスはその日の日記にこう書いて
いる。

「ゆかりは、きつとあのコギヤルフ
アッシオンが気に入っていたにちがい
ない」



「もういいですよ。まあ名譽なことではあるんだし……」

ゆかりはにつこり笑った。

「ごめんね」

「気にしないで、クリス」

「でも、とにかくこのままじゃ外出できないわね」

タマリが呟いた。

「それだけはなんとかしなくちゃ」

「ねえ、こんなのはどう？」

クリスが発言する。

「メイクを変えて、髪型も変えて、変装するの。そうすりゃ気付かずに脱出できるんじゃない？」

「そりゃいいいわね。やってみましょ」

真理がはいだ声を出した。

実は彼女、幼稚園の先生という職業柄、普段はノーマイクに近いのだが、化粧やファッションには凝っているのだ。かくして、「ゆかり大変身作戦」はスタートした。

翌朝、香山家の前で張り込んでいたスカウトは唖然とした。

そこには思いきりヘソを出したタンクトップにジーンズを切って作った短パン。

髪はメッシュが入り、アップにしてまとめているゆかりがいた。

「ねえ、君。長い黒髪で、メガネをかけていて、大人しそうな子はいなかった？」

スカウトマンはゆかりに聞いた。

「いいえ？ そんな人いませんよ」

「ほんと？」

「ええ、まったく」

「あーん、そうかあ」

ケムに巻かれた顔のスカウトマンを後目に、何気ない顔して立ち去ろうとするゆかり。

しかし、スカウトマンは彼女に追いつがってこういつた。

「君もなかなかかわいいよね。トンガった恰好してるけど、品もあるし、知性的だし」

「え？ そ、そんな……」

動揺したゆかりの様子をみたスカウトマンはさらに口説いた。

「俺さ、あんまりスカウトの成績よくなくてさ……もし今回ダメならクビだつていわれてるんだよね」

「そうなんですか？」

「でも、俺結婚してるし、子供もいるし……」

「まあ、大変……」

「だからさ、お願い。面接を受けるだけでいいからさ」

同情したゆかりが

「面接だけなら……」

と言つてついて行こうとした瞬間！

「コラあ、それはウソだあ！」

そのあまりの声の大きさに振り向いたスカウトマンの前に、派手なスパン

コールのマントを着て、アイマスクをつけた金髪の女性が立っていた。

「な、なんだ、あんた？」

「私の名は金髪仮面。純真な少女を悪の道へと導く悪者、ついだに言えば、本当の女性の美しさを見抜けぬ愚か者め。覚悟しろ！」

「なんだつてえ、俺はこう見えてもレッキとしたモデルプロダクションのスカウトだぞ。悪へ導いたこともないし、女性の美しさを見抜く目には自信があるんだ」

「ホッホッホ……いま貴様が連れてくるチンチクリンな女とこの私を見比べてみる！」

そういうと金髪仮面はマントとアイマスクを脱いだ。

「ク……クリス……」

隠れて見ていたタマリが真理にささやく。

「真理さんが言つてた水着つてあれ？」

「そうなのよ」

頭を抱えながら真理が答えた。

そのとおり。

まさにヒモにしか見えない大胆を通り越したビキニのクリスが叫ぶ。

「ホッホッホッホ！ 見たか、この見事なプロパーション。そこの女とは格が違いわ」

「な、なん……」

「なんですつてえ！」

スカウトマンよりも早く反応したの



さて、しばらくして、プールサイドで、つまらなそうに3人の姿を眺めていたクリスに近づいた男がいた。

「ねえ、君ちよつといひかな?」

「だに(なに)? ナンバなら間に合ってるよ」

「そうじゃないよ。あの、競泳用の水着を着ている子、友達でしょ? 名前と連絡先を教えてくださいませんか?」

「本人に聞けば?」

「いや、実は俺、ある雑誌のカメラマンなんだけど、いきなりグラビアに乗せてビックリさせちゃおうっていう企画なんだ。絶対ナンバやスカウトマンじゃないから協力してよ」

「うーん、アイスクリームおごつてくれたら考えようかな?」

「バフエもつけるよ」

「OK!」

そんなやりとりがあったとも知らず、1週間のバカンスを終えた4人が、東京へ帰つてくると、香山家ではたいへんな騒ぎが起きていた。

玄関先で藤兵衛が数人の男たちと押し問答している。

「おじいちゃん、どうしたの?」

タミが声をかけるや、男たちは振り向き、4人を登見した。

「あつ、ゆかりちゃんだ」

「すげー、ホントにかわいい!」

「きゃつ、な、なんなの?」

「とにかく4人ともすぐに入りなさい。君たちはさつさと帰るんじや!」
藤兵衛が怒鳴り、騒ぎはとりあえずおさまった。

香山家茶の間

4人の前に一冊の週刊誌が出された。

「これじゃ」

「まあ……」

息を飲む4……いや3人。

そこには、競泳用の水着を着たゆかりが大きく掲載されていた。

「まったく……見事な……じやなかった、困ったことになったわい」

「でも、私撮られた覚えはないんですけど……」

ゆかりが細かい声でいう。

「じやが名前が載っているではないか」

「あつ、それ私!」

「え? クリス?」

「そうそう、最初の日にいったブルーサイドで声かけられたのよ」

そういうと、クリスは一部始終を話した。

「ひどいわ」

真理が怒る。

「どうして? 名誉なことじゃない?」
クリスには不思議そうな顔をしていった。

タミが加勢する。

「そうよ。すつ……いうらやまし!」

真理は、呆れて首をかしげながら説明する。

「そりゃタマちゃんやクリスならいいでしょうけど、ゆかりちゃんはそういうの苦手なの知ってるでしょ?」

これから雑誌の取材とかモデルのスカウトとかが押し掛けってくるんだから大変よ」

「そうか……そうだね、ゴメン。軽率だったよ」

クリスがすまなそうな声を出した。

「じやあさ、私が代わりに出てあげろ」

脳天気なタミ。

「はいはい、大きくなったらね」

「ブツ!」

真理に軽くあしらわれてしまった。

「冗談はさておき、これからどうするかじやな」

藤兵衛がいつになく真面目な声で言う。

「とりあえず、ゆかりさん。しばらくはここにいなさい。アパートではなにかとうるさいじやろう」

「はい、ありがとうございます」
ゆかりはホツとして頭を下げた。

その夜、彼女たちは、真理も含めて4人で香山家に泊まることになった。

「それにしても大変なことになったわね」

あらためて、真理が言う。

最初、遠くに聞こえたその声が、徐々にはっきり聞こえるようになったとき、真理は初めて、本当の笑顔を浮かべようとした。

そのとき、居間へきた藤兵衛が、核兵器のスイッチを押した。

「おお、真理さん、全部食べたのかじゃ、そのスープを飲んだら早速麻雀じゃな」

「そのスープを飲んだら……」

確かに、真理の小皿には、先ほどまできりたんぼがつかっていたスープが手つかずで残っている。

ブチッ! 真理の中で、最後のロブが大きな音を立てて切れた。

苦難の末登頂に成功した山が音を立てて崩れ落ちた。

そして真理は……

会心の笑顔を凍り付かせたまま、仰向けに沈んでいった。

その日の麻雀が中止になったのは言うまでもない。

その夜、さんざん怒られたクリスは、さすがにションボリしながら布団に入った。

「で、結局私の料理って、美味しかったのかしら……?」

ゆかりデビュー!?

それは暑い暑い夏の日のこと。

真理、ゆかり、タマミ、クリスの4人は、夏休みを利用して、軽井沢のリゾートホテルにやってきていた。

「しょうがないわねえ。じゃあブルー

サイドでジュースでも飲んでれば?」真理が呆れたようにクリスに言った。

「ごべんでー(ごめんね)、ずうずう(そうずう)」

すっかり風邪をひいたクリスはよろよろと立ち去った。

「どうしたの?」

タマミが真理に聞く。

「クリスったら、昨日からはしゃいじゃって水着で寝てたのよ。それで案の定風邪ひいたってわけ!」

「なーんだ。クリスらしいわね」

「でも……大丈夫なの?」

心配そうに聞いたのはゆかりだ。「大丈夫。別に熱があるわけじゃないのよ」

「ならいいけど……」

真理は笑いながら続けた。「でも残念ね。クリスの水着姿だったのよ。ひものようなハイレグで」

「へー、いいなあ」

タマミが呟く。

「あら、タマちゃんだってかわいいじゃない」

これはゆかり。

「へへへ、ゆかりさんの競泳用に比べればね」

「あら、競泳用なんてほんとにプロボーションがよくなければ着れないのよ」真理が助け船を出した。

「でも、結局お互い部屋の中で水着の見せっこをしていたわけね」

ゆかりが笑いがらいう。

「まあ、女の子だからね、一応あたしも」

真理の一言でオチがついた3人は、思い思いに泳ぐことにした。





は、真理のモラルをくつがえさんと、必死の反撃を試みる。

ついに、真理の術が、きりたんぽを斬り裂いた。

断末魔の悲鳴のかわりに、熱いスーブを吹き出すきりたんぽ。

しかし、強靱な真理の理性は、悲鳴をあげながらもその衝撃に堪えた。

「あつっーい!」

そういういながら真理が浮かべた笑顔は、クリスからみれば泣き顔にほかならなかったが、とにかく、最初の一撃は成功した。

しかも、先ほどまで踊り狂っていた辛さは、今の熱さでなりをひそめている。

チャンスだ。

真理は敢然と二口目に突入した。

泣き出したくなるような衝撃! 座っていた畳が針のむしろになる。

しかし、ここでも真理の理性は堪えた。

丈夫なワイヤーロープが音を立ててはじけながら、最後の一本だけがつかっている。

いよいよ残すは半分。

ふと見ると、気を失ったゆかりが天使のようなあどけない、心地よさそうな顔で横たわっている。

クリスとタマミが心配そうに、真理の顔をのぞき込んでいる。

「真理さん、あんまり無理しなくていいよ」

遠くの方で……いや、実は目の前なのだが、タマミがささやく。

しかし、真理はもう、自分がなんのためにきりたんぽと格闘しているのかもわからずに、こう口走っていた。

「大丈夫。お姉さんに任せなさい!」

「こわいよー! キレてるよお」

タマミが言う。

「ちょっとやりすぎたかな?」

クリスも小声でささやいた。

驚いたことに、真理はさらに口を動かす、もはや残るのは2センチほどというところまで、きりたんぽを追いつめ

た。

「フフフ……みたか! あたしにかなうものはないのよ。ウフ、ウフ」

もはや、流れ出す汗を拭こうともせず、目をぎらつかせながら真理は口走る。

抵抗しても無駄だと思ったのだろうか? きりたんぽも、じっとしていた。

「うりゃあ」

真理が箸を突き立てる。

悲鳴もあげず(当たり前だ)、くし

ざしになったきりたんぽを口に運ぶ。

音もなくきりたんぽは、真理の胃の中へ滑り落ちていった。

「すごーい」

たまみとクリスが歓声をあげる。



滴る汗……それは暑さによる汗なのか、脂汗なのかよくわからなかったが……それを拭いながら、残敵、すなわちマーパー豆腐ときりたんぼ鍋に立ち向かおうとしたゆかりだが、ご飯という援軍のない抵抗はあまりにも無謀であつた。

彼女の最大の失敗は、「辛さ」というマーパー豆腐との戦いから逃避しようとして、「熱さ」という、きりたんぼ鍋との二正面作戦を取ってしまったことである。

マーパー豆腐をすくうレンゲのうきを止め、まだ湯気のでているきりたんぼにかじりついた彼女の視界が霧につつまれた。

「やだ、湯気で眼鏡がくもっちゃった……」

そういつて眼鏡をはずして拭こうとしたが、眼鏡をはずしても霧は晴れなかった。

やがて、湯気は激しい蒸気の竜巻となり、彼女に襲いかかった。

熱風に巻き上げられた彼女は、干したての布団にたたき落とされ、さらにその布団が丸まって、布団むしが完成した。

「もう……ダメ……ごめんなさい……」

そう言い残して彼女はちゃぶ台の下に沈んでいった。

「ゆかりちゃん、あんたのことは絶対に一生忘れないよ!」

といったかどうかは知らないが、残された真理の善戦は、歴史に残るものであつた。

彼女は、戦い……つまり食事……を開始するにあたって、ゆかりとは正反対の戦術を選択した。

すなわち、完全なる各個撃破方式である。

やや行儀が悪くなるのを承知で、まずはキムチを頼張る。

小皿に盛られたキムチは、真理の舌で発火せんとしたが、その前にご飯によつて胃袋の底に追い落とされてしまった。

「ふふん、どんなもんよ」

「真理さん、なに笑ってるの? お

いしい?」

不審そうに声をかけたタマミに笑いを返す余裕を見せた真理は、第二戦線、マーパー豆腐に突撃した。

ひたすら、皿から料理をすくっては口へ運ぶ。

舌の上で、料理が自己主張を始める前に次のレンゲが後続を運んでくる。

やがて、マーパー豆腐の下に隠されていた皿の底が見えてきたとき、彼女は勝利を確信した。

「あと3口、いえ2口でマーパー豆腐はなくなるわ」

そのとき、彼女の身体の中で、ネズ

ミ火花がきらめいた。

その実力を発揮することなく、胃の中に落とされたキムチとマーパー豆腐が、ならばとばかりギリギリに打つてたのだ。

舌の上にしがみついていた唐がらしの破片がタツプダンスを踊り始めたのをきつかけに、胃の中で、消化されずにいた大軍がここぞとばかりデイスコダンスを繰り広げた。

胃がカアツとなったのを自覚した真理の手首のスピードがガクンと落ちた。

「ク、クリス……お水をもう一杯!」

彼女は、水という増援を求めた。

が、さすがにうがいをするわけにはいかない。

増援はあつというまに喉もとを通りすぎ、胃の中へと吸い込まれてしまった。

それでも、最後の一口を食べ終わつた彼女は、ついに敵の本陣ともいうべき、「きりたんぼ鍋」への攻撃を開始することができた。

必死にこらえていた汗が、額に滲み出す。

ほこはこと煮崩れたきりたんぼが巨大な姿を表した。

「好き嫌いしちゃうけません。なんでも美味しく食べるのよ!」

いつも子供たちと言っている言葉で自分に鞭をうつ。

しかし、きりたんぼの熱エネルギー



P R I V A T E

Novels ●クリス&タマミのお料理万歳! ●

「……ブハッ」
「なかなか男らしいね」
「やだ。はしたなかった?」
「そんなことないよ」
真理も喉を鳴らして水を飲んでた。
ちやぶ台には、まだキムチもマーボー豆腐も残っている。
「おいしくなかった?」
悲しそうな声で聞くクリス。
「そ、そんなことないって!」
慌てて真理が否定する。
「その……ご飯、ご飯はないの?」
ゆかりはそういつて場を取り繕うとした。
「わあ、結構食欲あるんじゃない」
クリスはそういって、お碗に大盛りのご飯を持ってきた。
「まさか、かやくご飯なんてことないわよね」
真理は冗談めかして言ったが、そんな皮肉が通用するクリスではない。
そのごはんの量の多さに、内心げんなりした二人に、とどめの一撃が加えられるようにしていた。
「はい。いよいよ今日のメインディッシュです!」
けたたましさを感じる脳天気なタマミの声とともに出された“それ”は、煮えたぎった黄金色のスープをたたえた土鍋であった。
鍋からは間欠泉のごとく湯気が立ち登り、箸をも溶かそうかという熱気が

感じられる。
「これ、材料探すの苦労したんだよ」
クリスがあくまで悪意なく自慢する。かくして、クリスとタマミの監視の目が光る中、真理とゆかりの地獄のひととき夕食が始まった。
最初から夏バテ気味だったゆかりは、それでも襲い来るおかずに対して善戦したといえるだろう。

ご飯を口にはおりこみ、それと一緒におかずを食べるという方法で、なんとか辛さを中和しようという戦術は、キムチとマーボー豆腐半分までは効をそうした。
しかし、もともとどちらかというと食の細い彼女にとって、そこに行き着くまでに消費したご飯3杯は、いささか胃袋の許容範囲を越えるものであった。



確かに梅雨が明けてからというもの、真理とゆかりは連戦連勝の勢いだった。

「なんの、今日こそ負けやせんぞ」
藤兵衛は自信ありげに答えた。

「ところでおじいさん、夕食は？」
「あ、ああ、わしや先に済ませてしまったわ」

「あら？」
「まあ腹が減っては戦はできんからな」

ゆかりが重ねて聞く。
「タマちゃんは？」

「クリスといっしょに作っておるから、味見だけで腹が一怀だとかいっておった」

「あら、それじゃ私たちだけ？」
「真理が不安げにいう。」

「なに、心配することはない。クリスはともかくタマミの料理の腕は確かじゃ」

「そりやそうですけど……」

真理はそういいながらも、なぜか心に涼しい風が吹いてくるのを感じていた。

「できたよー！」
たまみの元氣な声とともに料理が運ばれてきた。

ちゃぶ台に座った真理とゆかりの前に最初に運ばれてきたのはキムチである。

赤々とした唐がらしの色が辛さを物

語っている。

「うわー、暑いときは辛い物がいいっていうけどねえ」
真理が呟く。

「ま、味見してみて」
クリスがニコニコ笑いながら二人を見比べている。

その笑いに引き込まれて、一口箸をつけた二人の口の中では、唐がらしの赤が炎のようにゆらめいた気がした。

「おっ、おいしいわね」
氣丈に真理が微笑む。

ゆかりも、声は出ないものの、にっこり笑って見せた。

「よかった！」
クリスは無邪氣(?)に笑った。

「じゃあ次ね」
そういつてタマミが運んできたのは、皿いっぱい盛られたマーボー豆腐だ。

「四川風の辛口中華よ！」

いわれなくても、溶岩のように煮えたぎったスープに、豆腐が放り込まれている。

クリスの笑顔が、二人を味覚の噴火口の中へいざなった。

ゆかりは、顔から汗が吹き出すのを感じた。が、あらんかぎりの勇氣と根性を振り絞って、レンゲを握りしめ、溶岩の中へ突撃した。

それを見た真理も、器用に、見えなところだけに汗を吹きださせ、ゆかりに続いた。

キムチによって火をつけられた口の中に、溶岩が流し込まれる。

悲鳴をあげたくなるのをこらえて、ゆかりが口をひたした。

「ね、ねえ、クリス。お水もらえる？」
「OK! ちょっと待ってて」

クリスが台所へ消える後ろ姿を見ながら、二人はもはや進むことも退くこともできない自分たちの状態に気がついた。

「ちょっと、たまんないわね」
真理が小声でいう。

だが、ゆかりは律儀だった。
「でも、クリスが初めて作った料理ですもの。食べてあげなきゃ……」

そのころ、台所では主犯格の二人と藤兵衛が意地の悪い笑みを浮かべていた。

タマミが目を見張らせてきく。

「どう？ 二人の様子は？」

「真理はまだまだ。ゆかりはもうフラフラよ」

クリスが、コップに水を入れながら答える。

「へへっ、じゃあいよいよメインデイッシュといきますか？」

「はい。お水」

クリスが差し出したコップをひったくるようにして、ゆかりは水をあおった。



藤兵衛が顔を出す。

「あつ、おじいちゃん、お帰りー」

「今日はなんじゃ?」

「きりたんば鍋だよ」

「な? この真夏に?」

「しょうがないじゃない。材料があるんだもん」

タマミが横目でクリスを睨む。

クリスは肩をすくめてみせた。

「ねっ、おじいちゃん。相談があるんだけど……」

すばやくタマミが藤兵衛に耳打ちする。

「なに? 麻雀を? フフ、面白そうじゃな。よし、乗った!」

藤兵衛も苦笑いを浮かべて居間へひっこんだ。

「タマちゃん、なんていったの?」

クリスが聞く。

「いやあ、食事の後麻雀しよっていっただけよ」

「麻雀?」

「そう。最近、あの二人勝ち放しじゃない」

「なるほど。そこで食事でフラフラにして……」

「カモにしちやえってわけ!」

タマミは、自分のアイデアによいしれていた。

「そろそろ真理さんとゆかりさんを呼んだほうがいいんじゃない?」

クリスの顔をのぞき込みながらタマ

ミは促した。

「そうね」

そういつて、クリスは小走りに電話へと向かった。

「もしもし、真理さん? 暑いね

ところで、今夜こっちにご飯食べに来ない? ええ、暑さを吹き飛ばすような美味しい料理を作ったの。タマちゃん……」

「こんばんわー」

夕方になると、真理とゆかりが連れだってやってきた。

「夕方になっても全然涼しくなりませんね」

ゆかりがぼやく。

しかし、あたりまえである。彼女は、この暑さにも関わらず、夏物とはいえ上着を羽織っていたのだから……

「ほんと。あんまり食欲もないんだけど……」

そういう真理のほうも、薄手のブラウスにふくらはぎ丈のスカートという服装だ。

クリスが出迎える。

「そんなこといわないで。私が初めて作ったんだから。美味しいよ」

いつも陽気で自信満々なクリスが妙にしらぬい態度で声をかけたので、二人は言葉も失ってしまった。

「へ、へえ、何を作ったの?」

おそろおそろ真理が聞く。

「内緒。出でからのお楽しみだよ」

クリスはそういうと、意味ありげな笑いを残して台所へ消えていった。残された二人は互いに顔を見合わせる。

「大丈夫? ゆかりちゃん。顔赤いわよ」

「ええ……でもこんなに暑いとは」

「あなた北海道生まれですものね。こっちの暑さは応えるでしょ?」

「まあね。せめてクーラーがあれば……」

ゆかりはそばにあった扇風機を「強」にした。

「上着脱いじゃええ?」

真理はそういうと、自分もブラウスのボタンを2つほど緩めた。

ゆかりもいわれるままに上着をぬいで

「フウ」

とため息を吐いた。

そこへ藤兵衛が姿を現した。

「おう、来ておったのか」

「あら? こんばんは」

「食事の後は麻雀するんじゃない?」

「え? ええ、いいですよ。ねっ、真理さん」

「もちろん! 最近私勝ってますからね」

真理は不敵な笑みを浮かべる。

「そういえば、私も負け知らずだわ」

ゆかりも笑った。



ORIGINAL NOVELS

four story

作：羽山 大輔
挿絵：片桐莊三

クリス&タマミの お料理万歳！

「それじゃあ、暑いからって宿題を忘れないようにな」

そんな先生の声に送られて、校門を出たタマミの上から、灼熱の太陽が降り注いでいた。

「もう、たまらないなあ」

「アハハ、そういえばタマミの家ってクーラーないんだよなあ」

友人の恵美がバカにする。

「うるさいわねえ、おじいちゃんの方針なのよ。」「わしの目の黒い内はクーラーは入れない」ってね」

「お気の毒に！」

「あーあ、冷蔵庫にアイスがあったかしら？」

「アイスで涼しくなれるならいいじゃない」

「フン！ じゃあね」

「バイバイ。がんばってね」

恵美の妙に陽気な声が不快指数を増大させる。

「もう！ 人の気も知らないで……あーもう、暑い暑いあつーい！」

「ただいまー！ 暑いねー」

そういつてタマミが玄関のドアを開けたとたん、

「あつツ！」

ガツチャーンという音とともに、皿が割れ、鍋が落ちた。

「キヤアツ、なに？」

あわてて台所に行くと、クリスが床に座り込んでいる。

「どうしたの？」

「あつ……えへ……お帰り」

クリスはそういつて笑った。

「なーに？ またわけのわからないもの作ってたんではよ？」

「そんなことはないわよ」

「どれどれ？」

タマミはそういつて、テーブルの上に置かれた料理の本に目を通す。

開かれたページには、「きりたんぼ鍋」が紹介されていた。

なるほど、本の横にはきりたんぼを始めたとする材料が並べられている。

「ちよつと待ってよ。これは寒いときに……」

「だけど材料かつちやったもん」

「ひえー！！ こりやガマン大会だわ」ところが、それを聞いたクリスはニヤつと笑った。

「それ、面白いね」

タマミも、釣られたようだ。

「この美味しさはみんなにも教えてあげなくちゃね」

「フフフ……」

「へへへ……」
そうと決まれば、急いで料理を作る

しかない。

あわててシャワーを浴びてきたタマミは、エプロンをつけて台所に立った。

「クリスも懲りないわねえ……この間も『クリス流刺身』とかいう魚のブツ切りを出してみんなに呆れられてたじゃない」

「日本文化を知るにはまず食文化から。学問に試行錯誤はつきものよ」

「その犠牲になる身にもなつてちゃうだいい……あーあ、こんなに汚しちゃつて」

「ごめんねえ」

クリスが、手を合わせて拝む真似をする。

その仕草があまりにも可愛らしかったので、タマミは吹きだした。

「わーお、いつもながらタマミの手際はいいねえ」

「へへへんだ。褒めてもなんにもあげないよん」

それでも自慢気に笑うタマミ。こう見えても、小学校のときから、忙しいお母さんになつて、タマミは香山家の料理番だったのだ。

さといも、ニンジン、ゴボウ、ニラ……トントントントンと手早く切り、ダシの入った鍋に入れていく。

やがて、美味しそうな匂いが鍋から流れだしてきた。

「ほう、いい匂いじゃのう」

P R I V A T E

●ドラマCD・BOOK プライベート スーパーリアル麻雀P.V.I●



ドラマCD キャスト

香山タミミ……………豊嶋真千子
来宮ゆかり……………大塚 瑞恵
梨原 真理……………柳沢三千代
ワリス・オーランド……………小山 裕香
香山藤兵衛……………八奈見乗児



宇和川恵美
中井 和哉
増 田 均
鈴木麻里子
野島 健児
前田千亜紀
弘 市 淳
南 民 恵
大場 良人

ドラマCD 制作スタッフ

Producer……………田中 彰 エノクスワン！
Director……………島島和也 (エノクスワン！)
Scenario……………羽山 大輔
Music……………見里朝生
Sound Effect……………小原孝司 (音美夢)
Recording engineer
……………川崎公敏 (タバノク)
……………上村利秋 (アパコリスイブススタジオ)
Recording studio……………タバノク
……………アパコリスイブススタジオ

BOOK 制作スタッフ

編集制作……………TRAP
editor in chief……………村中ヤイチ
desk……………阿部えきこ
writer……………どわあふ澤田
……………榊原その子
……………正林まあや
cover illustration……………田 中 良

special thanks to

石山康恵 (セタ) 須永智 (セタ) 角 旗昭 (青、ブザンカ)

企画・編集

監査役 司 (ビクターエンタテインメント)

発行日 1996年7月10日初版発行
発行人 加藤清雄
編集人 小川隆聖
発行所 ビクター・ノクス/ビクターエンタテインメント株式会社
〒150 東京都渋谷区神宮前6-19-13 J-6ビル 9F
TEL 03-3486 4361 FAX 03-3486 4273
制作協力 株式会社セタ
印刷所 大日本印刷株式会社

© 1996 SETA CO., LTD
© Victor Entertainment, Inc

著丁本・私丁本は小社宛にお送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします

ISBN4-89389-121-9 C0076



プライベート



© 1994 GITA CO., LTD.



プライベート

TRACK CHAPTER

●TRACK 1 / オープニング……「もうちょっとでいい感じ」

●TRACK 2 / 第1話……ハッピーバースデイ！ ■タマミ篇

●TRACK 3 / 第2話……優雅な午後のドライブ ■ゆかり篇

●TRACK 4 / 第3話……ちょっとした大事件 ■真 理篇

●TRACK 5 / 第4話……おじいちゃんのたくらみ ■クリス篇

●TRACK 6 / エンディング……タマミの出演者紹介

●TRACK 7 / ボーナストラック

○タマミ役/豊嶋真千子コメント ～真千子のお願い～

○ゆかり役/大塚 端恵コメント ～端 恵の賞 悔～

○真 理役/柳沢三千代コメント ～三千代の元 気～

○クリス役/小山 裕香コメント ～裕 香のお 礼～

○鑑兵衛役/八奈見乗見コメント ～乗 見の弁 解～



スパー リアル麻雀

PV

オリジナル声優キャスト★サウンドトラック
ドラマCD
BOOK

11月27日

PV
カースティック・サウンド
ドラマCD
BOOK
プライベート



タマミ ● 豊船真千子



ゆかり ● 大塚 唯恵



まみ ● 柳沢 千代



クリス ● 小山 裕香

郵便はがき

お手数ですが

50円切手をは

ってください

150

東京都渋谷区神宮前6-19-13
J-6ビル9F

ビクターエンタテインメント(株)

ビクターブックス

ゲーム書籍編集部 行

住所 -

☎

()

氏
名

年
齢

性
別

男
女

職業・勤務先
学校(学部・学年)

お買い上げ
の 書 名

スーパーリアル麻雀PVI ドラマCDブック

■本書をどのようにお知りになりましたか

- ☐ 書店で見て ☐ 人にすすめられて
☐ その他 ()

■本書について

	良	↔	悪		良	↔	悪
内容	☐	☐	☐	読みやすさ	☐	☐	☐
表紙	☐	☐	☐	価格	☐	☐	☐
ドラマCD	☐	☐	☐	小説	☐	☐	☐

■本書を買った理由をお聞かせください

- ☐ 「スーパーリアル麻雀」のゲームが好きだから
☐ 好きな声優さんが出演しているから
☐ 前作(スーパーリアル麻雀PVI-メモリーズ)の内容がよかったから
☐ その他 ()

■その他、本書への御意見、御感想などありましたら、御自由にお書きください。